

第 4 章

地域子育て支援を進める際に気をつけたいこと

1. 事例にみられる7つの力

保育所が取り組む地域子育て支援事業の実践について、第3章で紹介してきました。紹介した事業は、編集委員会が設定したテーマに沿って、実際に事業を担っておられる方々に書いていただいたものです。したがって、本書を参考にしていた方々には、それぞれの保育所が取り組んでおられる地域子育て支援活動のすべてを表すものではないことを、まず了解しておいていただきたいと思えます。

以上のように、事例は、それぞれの保育所の全体像を示すものではないという前提ですが、限られた活動の中にも、地域子育て支援活動の特徴がよく現れています。それを7つの力と名付けてみたいと思えます。

1) 活動情報を発信する力

「保育所は、当該保育所が主として利用される地域の住民に対してその行う保育に関し情報の提供を行い、並びにその行う保育に支障がない限りにおいて、乳児、幼児等の保育に関する相談に応じ、及び助言を行うよう努めなければならない」(児童福祉法第48条の3)。保育所には法律的にも情報提供の努力義務が課せられています。情報媒体の多様化、理解しやすく、使いやすい情報発信の方法の開発などが進み、保育所の情報発信力は毎年のように向上しています。本書で紹介した事例の多くに、活動情報の資料が添付されていますが、これを見てもそれぞれの保育所でさまざまな工夫がされていることがわかります。

ホームページをもっている保育所が多くなっていますが、これを日々職員で書きかえているところは必ずしも多くないと思えます。しかしながら、更新がなければ、一般の閲覧者はやがて遠のきま

すし、保育所利用者の閲覧もほとんどなくなるはずでです。わかば保育園の取り組みは、常に新鮮な情報、しかも会員制で情報を管理しつつ双方向で利用できる手段を用いているため、保育所利用者に対しても有効な手段となっています。メールやネットに日常的に慣れ親しんできた世代にとって、そこで使われる独特の語法や絵文字は、温かみさえ感じさせることができます。

マイ保育園制度の活動をしているよしたけ保育園は、当然のことながら、情報提供や相談体制が充実しています。パソコン用のホームページは多くの保育所がもっていると思いますが、ケータイ用のホームページとなると、かなり減るはずでです。これもよしたけ保育園の特徴といえることができるでしょう。

2) 地域や親子の姿をつかみそれを事業に展開する力

事業を開始するには、地域で何が起きているかに敏感になることが重要です。これは、問題を発見する力、あるいはアセスメント能力ということもできます。発見した問題を解決するためには、これを事業に企画する力が必要です。

すみれ第二保育園の一時保育では、入院中のきょうだいへの付き添いという内容がみられます。このような例は、国の制度説明では必ずしも示されていなかったものです。しかも、長期化すると判断した時点で、広域入所へと切り替えるという判断も非常に巧みです。

勝山保育園が地域で構築している「こどもなんでもネットワーク下関」は、30もの団体が参加し、代表者会議のような形式的なネットワークではなく、日常的な取り組みを定期的に行っている点に特徴があります。このような多様な団体を組織する力、それを事業に展開する力は、地域子育て支援

活動の幅を大きく広げるとともに、保育所の活動だけではなく、地域そのものの活動へと拡大させていきます。

山東保育園のばあちゃんちの取り組みは、とりわけユニークです。まるで、おばあちゃんごと借り上げたかのような企画は、これまでほとんどなかったと思われます。これも、日頃から地域で何が起きているかに敏感であったこと、そのような付き合いを園長先生自身がされていたことの成果だと考えられます。

3) 親子の心に寄り添い成長を育む力

地域子育て支援活動の第一歩は、親子への寄り添いです。したがって、このような力はすべての事例に見られるわけですが、ここでは3つの園を取り上げ、簡単にコメントしておきましょう。

ことぶき乳児保育園の特徴の一つは、付帯事業である送迎を、事業展開に応じて拡大している点です。就学前と就学後で大きく変わる子どもの登降園の不安に気がついた保育所が、学童保育にも送迎をつけるという保護者の安心をかうサービスを目指しています。

双葉保育園（逗子市）では、親子という視点だけでなく、親個人に向かうという視点が明確にみられます。子育て期は、当然子どもの成長を図る責任が親にはありますが、24時間365日をこれに費やすというのは、現代の状況下では酷な課題です。リフレッシュの機会を提供することや、母親同士の交流を図ることも重要な子育て支援活動となります。

保育日誌のネット配信というわかば保育園の取り組みは、ケータイやネットに日常的に慣れ親しんできた世代にとって、親しみのあるものとなっていると考えられます。親子の気持ちに寄り添うとは、それぞれの目線、文化を共有することから

始まります。最初から否定するのではなく、まずは受け止め、そこから必要があれば一緒に変わっていくという姿勢が大切です。

4) 地域特性に合わせて活動を工夫する力

保育所保育の目的の一つは、親子の生活支援を行いながら、子どもの生活の基礎を作ることにあります。地域子育て支援では、これを直接、親とともに行う点に特徴があります。親自身の日常生活を背景にした活動ですから、地域住民の生活や地域社会の様子を日頃からよく周知し、これを活動の中に取り入れていくと、より生活に密着した活動になるものと思います。

双葉保育園（北広島町）は、過疎地の特性を生かし、住民も含めた地域の環境を保育や子育て支援の活動のなかに取り入れています。「保育に欠ける」「保育に欠けない」という制度上の枠を越えた、親子や地域住民との交流が報告によく現れています。また、自園だけがセンター型事業を実施しているという点を考慮し、周辺の保育所での出張活動も評価できます。

山東保育園も、地方都市の特性や、周辺にまだ田畑が残っているという環境を生かした保育活動や、子育て支援活動に取り組んでいます。保育所保育に地域環境を取り入れるというのは一般的に見られる取り組みですが、地域子育て支援になると、非日常的な特別なプログラムが用意されることがよくあります。とりわけ、母親には、日常とは違う時間を味わってもらうことも重要ですが、生活は現実のものであり、活動の中心は日常性、地域性を重視したものでありたいものです。

5) 制度を呼び込む力

地域子育て支援活動は、直接それを支援する制度があろうがなかろうが、児童福祉法においては、

それぞれの保育所の努力義務として求められています。さらに、保育所保育指針では、これをさらに強化するものとなっています。しかしながら、職員や資源を導入せずに、既存の体制だけでこれを行うには限界があります。そうすると、国や市町村の制度に常にアンテナをはり、自園で取り組む必要性のある事業あるいは取り組み可能な事業があれば、これを導入する力が管理職には求められることになります。

ことぶき乳児保育園の送迎保育ステーションの導入過程では、自園の立地をみつめ、行政からの打診に速やかに応じています。その際には、行政の補助要件を満たすために、園長自らが土地を購入するという努力もされています。実際に実現するまでには、かなりの困難があったようですが、利用者のためにこれにも丁寧に対応されています。

よしたけ保育園は、県の実施するマイ保育園制度の導入に前向きに取り組んでおられます。制度の趣旨をよく理解され、職員も含めて取り組んでおられる様子が伝わってきます。とりわけ、この制度の神髄である子育て支援コーディネーターの育成の姿勢には興味深いものがあります。

6) 地域資源を呼び込む力・創り出す力

地域子育て支援は、保育所保育指針にも示されているように、当該保育園の固有の活動というよりも、そこを拠点として、地域を巻き込んで展開することが望ましいと考えられます。そのためには、地域にある各種の社会資源を呼び込んだり、自ら社会資源を創出することも必要になります。

すみれ第二保育園の活動をみると、一時保育は専門スタッフで行う必要がありますが、それ以外の活動への展開に限界があると感じられた結果、NPO法人との積極的協働を進めておられます。その結果、活動が大きく広がり、相互にメリットの

ある関係が構築されています。

双葉保育園（北広島町）では、地域に生息しているオオサンショウウオとの共生を図りつつ、自然体験保育を積極的に導入しています。これが、保育所の活動を越え、地域住民そのものが参加した活動へと展開しています。おそらく、地域なかでは、日常的に子どもや保護者と、地域住民との交流が芽生えつつあるものと推測されます。保育所が拠点の一つになって、地域そのもののまとまりがでてきている例と考えられます。

7) チームで仕事をする力

地域子育て支援拠点事業「センター型」では、職員2名の配置を原則としています。しかし、この2人だけで事業を展開しようとするとは自ずと限界があります。そうすると、少なくとも保育所内でチームを編成し、核となるのがセンタースタッフという体制を組む必要があります。直接配属されていない職員も、いつ異動するか分からないわけですし、地域の子育て事情にも精通しておく必要があります。また、職員だけでは限界と考えられることも多いので、地域全体でチームを組むという姿勢も重要です。

双葉保育園（逗子市）は、園内での体制を作り上げている好例です。保育士に限らず、栄養士までも一つのチームとして組織され、準備段階からの参加が図られています。アンケートによりそれを振り返るという点も重要で、このような個々の声を聞くことが、事業の見直しにつながります。

勝山保育園の場合は、問題の対処能力を高めるため、地域全体でネットワークを形成し、一つの大きなチームを組んでいるという点に特徴があります。ネットワークの一員となっている保育所は少なくないと思いますが、自らネットワークの核となっている保育所は必ずしも多くないと考えら

れます。地域の多様な資源が連携することで、地域全体に目配りができる体制、全体で質を上げていく体制ができあがっているようです。

2. 地域子育て支援を進める際に気をつけたこと

子育て支援活動を実施する際には、以下の5点に留意していただきたいと思います。第1章では、保育士の援助技術面について整理していますが、ここでは組織視点を入れ、内容を一部重複させながら説明しておきます。

1) 親と子の主体性を支援する

子育て支援は、支援者のために存在するものではありません。主役は、あくまでも親と子どもであり、それぞれの主体的に生きる力を支援するものです。そのためには、指導や教育という視点ではなく、育ちを見守るあるいは促すという視点が必要となります。親子の育ちや置かれている状況を適切に判断し、それぞれに応じた側面的な支援に努めることを心掛けていただきたいと思います。

2) 活動を柔軟に修正する

活動を実施していく過程において、問題や環境が変化することもあります。また、初期のニーズ把握が適切でなかったり、情報収集が不十分なままに活動に入らなければならないこともあります。さらには、目標設定が適切でなかったり、具体的な活動がうまく展開できなかったために、有効な支援にならないということも考えられます。そのような場合には、活動の見直しを行い、必要な段階へと戻ること必要です。

3) 当事者・関係者の参加促進

地域子育て支援は、支援者と被支援者という、分断した関係で進めるものではありません。お互いに協力して行っていくものであり、プロセスが重要となります。そのためには、それぞれの段階において、親子の積極的参加・参画を図っていく必要があります。また、関係する社会資源の職員・協働も重要です。

4) チームによる援助活動の推進

活動を進めるにあたっては、担当の保育士が単独で行動するのではなく、所属機関内での事業の位置づけを確認し、各職員がどのような役割や機能を果たすのかを明らかにしていく必要があります。少なくとも所属機関内で、チームとして取り組んでいるという姿勢を明らかにすること、そのためのシステム作りが必要です。複数機関と協働して活動を進める際は、相互の意思確認やプロセスの進行管理にかかわるシステムが求められます。

5) スーパーバイズの必要性

担当保育士や推進チームにおいて迷いが生じたり、あるいは問題に気がつかないまま援助が進んでしまっていることもあります。そのような際に有効なのが、チーム会議であり、内部あるいは外部機関（個人）によるスーパーバイズです。スーパーバイズとは、担当者（スーパーバイザー）が、担当している事例の内容、援助方法などについて、専門家（スーパーバイザー）から助言や指導（スーパービジョン）を受け、活動を適切に進行していくことをいいます。

3. さらなるステップアップのために

地域子育て支援は、これからの保育所にとって

重要な活動となります。本書では、特徴的な実践事例を含め、基本的な考え方を紹介しました。より詳細には、『保育所保育指針』、『保育所保育指針解説書』および『幼稚園教育要領』をお読みい

ただきたいと思います。さらなるステップアップを考えておられる方々には、以下の5冊の図書を紹介しておきます。

(山縣)

著書名	執筆者	出版社	内 容
保育を創る8つのキーワード：新保育所保育指針解説	大場牧夫・網野武博・増田まゆみ編	フレーベル館	保育所保育指針改定に関わった委員による保育指針のポイント解説。8つのキーワードは、保育所児童保育要録、養護と教育の一体性、子どもの最善の利益、発達過程、協働、創意工夫、生活の場、組織としての保育力。
保育所における家庭支援：新保育所保育指針の理論と実践	金子恵美著	全国社会福祉協議会	保育所における家庭支援の理論と相談援助の技法を解説。課題別の事例を通して実践的に家庭支援を学ぶことができるような構成となっている。
保育者の保護者支援：保育指導の原理と技術	柏女霊峰・橋本真紀著	フレーベル館	保育者の専門性を生かした子育て支援、「保育を通じた保護者支援」を整理し、「保育指導」のあり方について事例やエピソードを加え、わかりやすく解説。
地域の子育て環境づくり	大日向雅美編	ぎょうせい	地域に根差した保育・子育て支援にスポットをあて、各自治体が行っている支援施策、地域NPO団体の行動、行政とNPOの協働のあり方などを分析する。「子育て支援シリーズ」全5巻の第3巻。
子育て支援とNPO：親を運転席に！ 支援職は助手席に！	原田正文著	朱鷺書房	乳児期から思春期までの子育て支援の基本的考え方を示した初期の本。現場の取り組みを紹介しながら、子育て支援のあり方を提案する。